

# 第1回里地里山保全・活用検討会議 議事概要

日 時 平成20年11月12日(火) 14:30～17:00

場 所 砂防会館別館

## 議 題

1. 里地里山保全・活用検討会議の目的等について
  - ①環境省における里地里山の施策
  - ②里地里山保全・活用検討会議の目的
2. 重要里地里山選定の考え方について
  - ①選定の対象及び視点、手順
  - ②選定の枠組及び評価の視点
3. 生物多様性の視点に立った自然資源の管理・利活用方策の検討について
  - ①検討の論点・方向性
  - ②検討手順

### ○議題1. 会議の目的等について

#### <環境省資料説明>

- ・単なる100選・300選というようなものではなく、地域を代表するお手本として選定したい。
- ・選定箇所には支援策を講じていくとともに、取組を分析し、他地域への波及、全国展開していく拠点としていきたい。
- ・保全利活用の促進方法を地元の声も聞きながら模索し、(里地里山の恵みを受ける)圏域全体での取り組みの仕組みを検討したい。

#### <質問・意見>

##### 【委員】

- ・用語の問題について。環境省がCOP9で配布した文書では、「里山」を「Countryside」と訳していたが、「Countryside」に対応するのは「里地里山」。訳が間違っているという指摘を外国人から受けた。「SATOYAMA」、「satoyama」、「countryside」等、英語で表現する時の定義を整理して欲しい。

##### 【環境省】

- ・里山は二次林、それに農地等が一体となった時に里地里山と定義している。英語のカントリーサイドランドスケープを大文字のSATOYAMAとしている。

##### 【委員】

- ・里地とは農地、集落のことで「ノラ」と「ムラ」、一方「ヤマ」というのは、植物資源の採取の場。この観点から見れば草原も入る。阿蘇の草原も「里山」。機能的な面を重視すれば整理しやすいのでは。

### 【委員】

- ・絶滅危惧種は春植物など温帯性の生活史の短い種が多い。沿岸部に分布を拡大しているが、地球温暖化で生息・生育大きな影響を受けている。世界的に温帯性植物のフェノロジーが狂っているという報告もあり、生物の生息場所を重視するならば、現状の分布だけを指標にするのは危険で、温暖化した場合の安定性も重視すべき。

### 【委員】

- ・SATOYAMA イニシアティブのネーミングについて、ネイティブで日本在住の専門家と議論した時、里地と里山の両方を並べると、英語では意味がわからなくなるので、SATOYAMA 一語に絞ろうということになった。このため satochi をつけず、大文字で SATOYAMA となった。意味は里地と里山の両方を含むものとして良いと思う。

### 【委員】

- ・重要里地里山のネーミングについて、「重要」と付けると、文化財のような感じがする。また、里地里山の保全上重要な地域を希少種保護の観点で選定するのは疑問。むしろ人と自然の関わり方が里地里山の特徴であり重要。
- ・SATOYAMA イニシアティブとして、日本が世界に主張するべきは、人と自然が良い関係を築いてきた日本人の独特の暮らしぶりに的をあて、これを広げていくこと。この点でイニシアティブをとるべき。
- ・そう考えると、重要里地里山は地域での取組の全体像を評価し、取組のコアと考えるべき。自然科学的な観点に矮小化した議論ではなく、国民的、世界的運動にするべき。
- ・資料1の8頁の表現については、少し修正が必要。  
日本に自然との共生を図る知恵と伝統はあったことは間違いない。しかし、戦後の高度成長以後の都市政策、農業・農村政策によって、都市と農村の伝統的なつながりが切れてしまった。その反省を入れるべき。
- ・その反省に立って、日本でも取り組んでいると打ち出した方が、世界に対して真実味がある。原生的なところは国立公園で守ってきたが、中間的なところは守れなかった。生産緑地も現況農地しか保護しなかったのが背後の樹林地は守れなかった。そういう辺りは反省すべき。

### 【環境省】

- ・生物的重要性だけでなく、文化、景観、活動等の観点から地域の拠点、地域の代表として選定していきたい。
- ・暮らしと生物多様性がどうかかわりがあるか、他の地域のお手本になる。そういう場所として位置づけていきたい。暮らしぶりや活動は大事な視点としたい。

### 【委員】

用語については、環境省から配布する資料に、当面、SATOYAMA イニシアティブの SATOYAMA 里地里山の意味だ、という注釈をいれるようにしてほしい。

## ○議題2. 重要里地里山選定の考え方について

<環境省資料説明>

## <質問・意見>

### 【委員】

- ・3点意見を述べたい。

第1点、文化庁は文化的景観の選定に足かけ3年かけており、3000の候補地を180に絞り込んだ。(これだけの期間をかけたので)今回も評価するとしている里地里山維持の基盤条件もしっかり調査している。また、これから冬になる。このため、生物に関するデータで新たにとれず、既存の資料だけで判断することとなる。半年もない期間で選定できるのか心配。過去にデータがないところは評価できない。今回はとりあえず選定し、今後追加選定できることにできないか。

- ・第2点、選定されたら環境省は経済的に支援するのか、という疑問は現場から出てくる。現場はシビアなので、支援策がないと候補地が出てこないのではないか。
- ・第3点、2.5万分の1植生図を分析して環境省が重要なところを、地域に対して逆提案するという方法もあるのではないか。全国、すくなくとも広島県の里山はどこでも何らかの保全活動はやっていて、その地方自治体でその重要度の軽重を判断するのは困難。

### 【委員】

- ・選定の手順に異論はない。補足すると、地方は高齢化して元気がない。生物多様性という新しい価値観が入ることによって希望や元気が沸いていくことが大切。
- ・人の管理によって維持されているのが里地里山の自然の特徴だが、管理放棄されても生物を見てみると、まだまだ大丈夫なところもある。シカが食べるのでかえって絶滅危惧種があったりする。
- ・なりわいに加えて、生物多様性の価値観を地域に加えることにより、地域の共同活動がよみがえるのではないか。

### 【委員】

- ・SATOYAMA イニシアティブは、国内向けにこそ重要なのでは。都市部の里地里山は各種制度で保全されているが、中山間地域の里地里山が危機的状況。限界集落の里地里山をモデルとしてたくさん引き出して行くべき。その場合、保全の担保を地域に求めると引いてしまう。各々の地域だけにその責務を押し付けるのではなく、日本全体で保全していくというイニシアティブが必要ではないか。

### 【委員】

- ・国民運動を目指すのなら、水、落ち葉などを暮らしの中でうまく循環させる智慧があったということを重視すべきで、そうしたものを世界に発信すべき。たまたま生きものがあるから保全しようという発信は疑問。循環を取り戻すということ掲げないとイニシアティブ、運動にはならない。

### 【委員】

- ・選定の妥当性を意識するあまり、緻密な基準に基づくと、SATAYAMA イニシアティブの目的にそぐわなくなってしまう。資料の21世紀環境立国戦略で言えば、今回の選定は、戦略2(生物多様性の保全による自然の恵みの享受と継承)だけでなく、戦略7(環境を感じ、考え、行動する人づくり)や戦略8(環境立国を支える仕組みづくり)も関係しているのではないか。
- ・これまでの〇〇選とは違うというのが今回の試み。SATOYAMA イニシアティブにつながってい

くという戦略目標を意識しないと選ぶ意味がない。希少種の保全をするのなら、生息地 100 選というような別の場でやれば良いと思う。

#### 【環境省】

- ・この点はまさに重要なポイントと認識。100 選や 300 選などの普及啓発ではなく、自然共生の知恵を現代に活かした持続可能な社会づくりに向けた全国的な国民運動へのステップと位置づけたい。そのためには、自然の質だけでなく、活動の盛り上がり—他の地域を引っ張っていけるような場所を積極的に評価したいと考えている。
- ・期間は短いですが、得られた情報のなかでお手本となる地域を選定する。情報が増えれば追加されていくという風につなげていきたい。
- ・支援措置としては生物多様性保全推進費、国立・国定公園、自然再生事業、各省庁との連携、自治体、企業など色々な手段を組み合わせさせて動かしていけばいいと思う。

#### 【委員】

- ・支援のプログラムも検討する。提案してもらおう。予算も取ってくるということですね。

#### 【環境省】

- ・重要里地里山という名称は再考する。お手本、英語にするとグッドプラクティス。やりたいことは、いい例として広めていくということだろう。
- ・支援策は環境省が音頭を取って、各省、民間の力も借りていきたい。
- ・文化的景観に比べ選定期間が短いことについては忸怩たる思い。追加選定も考えたい。

#### 【委員】

- ・里地里山を COP10 のエクスカージョンや会場として、海外にアピールすべきでないか。日本の農村は知られていなくて損している。水のある農村の環境が 2000 年続いてきたことを研究者や行政に知ってもらうべき。
- ・里地里山は農村の活性化の観点から農水省にとって重要な分野。国交省的にとっては、都市住民からもニーズが高い場所。文化的景観は文化庁施策そのもの。政府を挙げて、国民運動として取り組むのが大切では。
- ・そうだとすればどういう場所を選ぶのか。都市側からの入込みも評価すべき。また、サポートする人口、全国的バランス、県や大都市との位置関係、アクセスのしやすさも大切。
- ・生きものの生息地に特化したり、これ以上じゃないと評価できないとか、この要素がないといけないという選定のやり方はやめるべき。評価すべき要素のうち、どれでも良いから該当すれば良しとする。全国的なバランスの中でのモデル性を考える必要がある。

#### 【委員】

- ・地域の取組、自然循環という評価だけでよいのか。生物の評価もやはり必要ではないか。日本の恵まれた自然があったからこそ生きものが残ったのであって、生きものの持つ指標性というものも評価すべきではないか。
- ・しかしながら、生物の評価を地元の人にやってもらうというのは酷で、全国的視野からのトップダウン評価も必要。種数の考え方を入れるとか、メッシュのつながり、代替性のなさなど保全生物学的手法も検討してみたらどうか。
- ・景観については、単なる美しい景観というのではなく、トータルな環境を表現するものとして見ていく必要があるが、評価手法はまだよく見えない。

#### 【委員】

- ・資料3の2頁の図に示されている5つの評価の観点のうち、上の3つ（生物多様性保全、景観、伝統文化）と下の2つ（保全活動、維持再生の基盤）は異なっている。上は現状の評価で、下は将来に向けての保全や再生に関係すること、上の3つの観点については、重要性というよりはモデルとしての着目点としてとらえ、後の2つはこれを発展させる条件ということで評価したらどうか。

**【委員】**

- ・人と自然との関わり、生活文化、生業、営みそのものを評価するという視点が必要と思う。
- ・里地里山自体の多様性も重要で、今はなくなってモデルにはならないかもしれないが、少し前まで残っていたような営みも評価すべき。こういうケースは先ほどの観点とは別の意味でのトップダウン評価が必要と思う。
- ・「重要」というのがひっかかる。重要というよりは、特徴的、固有なという観点ではないか。
- ・選定自体も順応的にやっていったらどうか、暫定登録や登録追加などの方式。今は保全活動が活発でなくても、登録をきっかけに活動が活発化するということもある。

**【環境省】**

- ・トップダウンルートとしては、専門家による推薦を活用したい。また、データを解析してその評価を逆に地域に示すことも考えたい。

**○議題3. 生物多様性の視点に立った自然資源の管理・利活用方策の検討について**

<環境省資料説明>

<質問・意見>

**【委員】**

- ・評価手法を確立してから対策を検討するという手順になっているが、同時平行にやったほうがよいのでは。

**【委員】**

- ・里地里山の保全利活用はすでに様々な人が各地で検討しており、これから課題を調べる意味はあるのか。これらの情報を集約すればよい。現場では活動の事務局機能をどの様に確立するのが核ということがわかっている。人材や人件費などを誰がどのように負担するのか多くの里地里山で課題となっている。
- ・重要里地里山に戻るが、高齢者の視点を重視してほしい。80歳以上の高齢者は自然と向き合った生活を通じて蓄積された智恵の宝庫だが、今や絶滅危惧。そういう人がたくさんいる地域も里地里山文化の視点での指標として評価してほしい。

**【委員】**

- ・生物多様性は文化や人とのかかわりを含めて維持されるもの。従って、里地里山の維持では有形、無形の文化財のような視点が大事。バイオマスもあるが、食文化にも注目すべき。里地里山は本来農業生産の場であり、その利活用にとって地産地消は追い風になる。

**【委員】**

- ・一般市民の関心を呼び理解してもらうためには、里地里山の評価手法は必要。フローは細かいことは色々あるが基本は良いと思う。
- ・利活用は各地のノウハウを集めて集成することが大切。

**【委員】**

- ・重要里地里山選定は、小中学校など学校の（環境教育）プログラムがあるところを最優先すべき。地域の環境保全の新たな担い手育成を行っていることの評価指標となる。都市、農村にかかわらず現にプログラムが動いているところを探してほしい。

**【委員】**

- ・現存する里地里山の保全活用の本当の事務局は、自身は自覚していないが 70～80 代の農家。里地里山の利活用の本当のトップランナーはこの人たちだが、あと数年するといなくなってしまう。保全活用方策検討では、その現状、しくみをきっちりと把握し評価し対策を示すべき。
- ・地域での生業（なりわい）が成立することが地域が保全されていることであり、それを究極の目的とすべきである。
- ・良い里地里山が残っているところには必ずしくみがある。そこに着目すべき。

**【委員】**

- ・すでに認識されている課題の集約と個別のデータ収集・評価の両方の視点から評価を進めていくことが必要では。
- ・里地里山の保全はとても大きな政策課題、各省で連携して取り組んでほしい。

**【委員】**

- ・候補地の推薦はおおまかにやってもらえばよい。コンペ方式ではなく、地域の情報を集めるという視点で基準の話はあまり細かくしないこと。ねらいを明確にさえすれば、都道府県や市町村の職員は理解して情報を提供することが可能。検討の基礎となる素材は多ければ多いほどよい。
- ・モデルを選ぶところで議論すればよい。委員自身もみんなやっけて知っている。環境省による里地里山の6つの類型もあるし、80歳以上の人が住んでいるところも大切。今はいろんな人に情報をもらうということが大切。

(了)